九州全土を駆けめぐった忠烈の武士団

菊池一族

細い月が山際に隠れると、あたりは深い闇に包まれた。風はない。虫たちがしきりに鳴いている。ひどく蒸し暑い夜だ。

時は南北朝争乱の最中。正平十四年（一三五九）八月六日、丑の刻。筑後平野の大保原（現在の福岡県小郡町）を、黒い影の一団が幽かな草ずりの音をたてながら這うように進んでいく。菊池選りすぐりの夜襲隊三百人。少弐頼尚を総大将とする北朝方六万の軍勢の懐深く潜り込み、一気に切り込む手はずである。両軍の睨み合いは、既に十五日間にも及んでいた。九州南朝方四万の指揮を執る菊池武光は、ついに総攻撃の決断を下した。

夜空に上った一本の火矢が合図だった。夜襲隊はいっせいに鬨の声を上げ、敵陣に切り込んでいく。炎天下の長い対陣で疲れ果て、寝入りばなを不意討ちされた少弐軍は、大混乱に陥った。さらに、菊池の先鋒隊二千騎が正面から攻め込んだ。こうして、両軍合わせて十万の兵が入り乱れる大合戦の幕が切って落とされた。

血刀を振りかざした武光は、頼尚の本陣めがけてまっしぐらに突き進んでいく。激しい戦いで兜を打ち落とされ、数か所に傷を負いながらも、ひるむ気配すらない。既に鬼神の如き形相である。立ちはだかる敵将を切り倒して兜を奪い、馬をやられて乗り換えること十七回に及んだといわれている。怒濤のような菊池方の猛攻の前に、少弐軍は総崩れ、太宰府目指して敗走した。八時間にも及ぶ激戦だった。屍は野山を埋め尽くした。

この戦いを境に、北九州の雄・少弐氏の勢いは急速に衰えていく。二年後の正平十六年（一三六一）、少弐氏の本拠地太宰府を攻略した武光は、後醍醐天皇の皇子懐良親王を迎えてこの地に征西府を置いた。こうして、その後十一年間、九州全土は南朝の勢力下に置かれることになる。九州南朝の黄金時代であった。武光の武威は、いよいよ高まり、菊池氏の旗印「ならび鷹の羽」が各地で誇らしげに翻った。

新政第一の功労者

菊池氏の先祖は、太宰権帥藤原隆家とも伝えられているが定かではない。菊池郡の米原台地には七世紀頃、鞠智城という山塞が築かれ太宰府の管轄下に置かれていた。菊池氏はこの大化期の山城と結びつく菊池軍団に縁の豪族ではないか、という推測もなされている。

菊池武光

菊池氏が歴史の表舞台に登場するのは、元弘三年（一三三三）、十二代武時の博多探題館襲撃がその最初である。後醍醐天皇からの討幕の令旨を受けた武時は、九州探題北条英時を攻めたが、大友貞宗、少弐貞経に背かれ失敗。壮絶な死を遂げた。

しかし、この事件によって九州探題の権威は地に落ちた。その後、大友・少弐・島津の連合軍に攻められ北条英時は自害。ほぼ時を同じくして鎌倉幕府も崩壊した。世にいう建武の新政である。この頃行われた御前会議の席上で、楠木正成が「この度の合戦で忠烈の士は多いが、いずれも今日、命をながらえております。一人命を落としたのは肥後の武時入道のみ。彼こそ忠厚第一の者と存じます。」と申し上げると、天皇も深く頷かれたという。

菊池武重

華々しい活躍

しかし、平隠の時は長くは続かなかった。足利尊氏が反旗を翻したのである。武時の後を継いだ十三代武重は、尊氏討伐軍の先鋒をつとめ、箱根山の戦いで足利直義の軍をさんざんに打ち破った。青竹の先に短刀を結びつけたにわかごしらえの〝新兵器〟で部隊を編成、足利方を震えあがらせたのである。これが有名な「菊池千本槍」の起こりであり、我が国の実戦で槍が使用された最初だという。

しかし、この武重も二十六、七歳（推定）の若さで病没してしまう。国内のあちこちでは、じりじりと足利尊氏の北朝方が南朝方を圧倒し始めていた。こうした中で十四代武士が家督を継いだが、生来の病弱の為にわずか数年で地位を退いてしまった。一族の士気は低下し、しばしば菊池本領にまで、敵の侵入を許してしまう。菊池一族は危機に陥った。

この時現われたのが、武時の第十子武光。後の世の上杉謙信とも比較される一流の武将である。興国六年（一三四五）十五代を継いだ武光は、九州全土を縦横に駆けめぐり、その名を天下に轟かす。その一方では、深く禅宗に帰依し、鎌倉五山、京都五山にならって菊池五山を建立するなど、教学にも力を注いだ。菊池氏は、その歴史の中で最も華々しい時代を迎えたのである。

肥後精神の源流

しかし、既に、中央に於ける北朝方の地位は揺るぎないものになっていた。押し寄せる北朝方の大軍に圧倒され、文中一年（一三七二）ついに太宰府は陥落。武光は高良山（現在の福岡県久留米市）の陣に没した。その後も菊池氏は各地で抵抗を続けるが、明徳二年（一三九一）中央に於いて南北朝の合体が成立。ここに戦乱は終りを告げる。

菊池武時、武重、武光。乱世に生きたこの武将たちの生涯は、まさに南朝の興隆と一族の名誉を守る戦いに捧げられていたといっても過言ではない。南朝・北朝という中央の二大政権の争いの中で、多くの武将たちが利害に走り寝返りを繰り返した。こうした中で、南朝に忠誠を貫き通した菊池一族は、むしろ特異な存在であった。その是非はともかく、利に目を奪われて背信することを嫌う潔癖さ、いったん決めた方向を変更しない果敢さと頑固さは、単に菊池一族のみならず、後世の肥後人にもしばしば見出される精神的特徴のひとつではないだろうか。つまり、南北朝時代における菊池一族の行動こそ、歴史上に現われた最初の〝肥後人らしさ〟だったといえるのかもしれない。

参考文献
「太平記」
「熊本県人／渡辺京二」
「西国合戦記／読売新聞社」
「菊池一族の興亡／荒木栄司」

協力　菊池神社